２０１１年　３月

会　　報　第３１号

日本家庭科教育学会

中国地区会

目　次

家庭科教育の意義を社会に発信する必要性について　中国地区会会長　伊藤　圭子　1
第30回日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会報告　2
研究発表要旨　5
第30回日本家庭科教育学会中国地区会講演資料　岡山大学大学院教育学研究科　冨士田　亮子　12
　－民家（伝統的住まい）に学ぶ－
研究室だより　鳥取短期大学　杉本　真由実　16
学校現場から　岡山県吉備中央町立大和小学校　信清　亜希子　17
共同研究の募集について　18
本部だより　中国地区会代表者　西　敦子　19
事務局だより

家庭科教育の意義を社会に発信する必要性について

中国地区会会長　伊藤　圭子

「無縁社会」を扱ったNHKの番組に大きな反響が寄せられているようです。「無縁社会」とは，人と人とのつながりが希薄化した社会を意味しています。これまでは，家族や近隣の人々とのつながりを保ちながら生活することが当たり前と一般に考えられてきました。しかし，今日の日本ではこの当たり前の状況が維持できなくなっているという現実を，この番組が表出しています。つながりが断たれたことによって，多くの人々が不安な毎日を過ごし心の居場所を求め苦しんでいる深刻な様子が，映像の中に如実に映し出されています。

「人はポリス的な（社会的な）動物である。」というアリストテレスの有名な言葉があります。私たちは，生れると同時に人とのつながりを保ちながら生きています。子ども時代はもとより，青年期，壮年期，高齢期を経て一生を終えるその日まで，人とのつながりは生きていくうえで不可欠な要素のはずです。そのつながりが，今，希薄化しつつあるのです。

変化の激しい現代社会では，家族をはじめさまざまな人々とのつながりがいかに大切であるかを忘れがちです。つながりを無くしてしまい，その大切さに気づいた時には既に取り返しのつかない状況に陥っている，ということが起きているのです。このようなことにならないように，人とのつながりの大切さに気付かせ，豊かな人間関係をつくり上げ維持していく能力を育成する教育が求められています。

これに応えようとしているのが家庭科教育なのではないでしょうか。家庭科の授業では，人と人とが互いに尊重し合える社会，共に支え合って生きていく社会が構築できてはじめて，真に心豊かな生活が営めることを伝えているのです。この当たり前の生活が営める生活実践力の育成をめざした教育を行うことが家庭科の本来の姿であると私は考えます。小・中・高校の先生方と大学教員が協力し合って，この家庭科教育の重要性について社会に向かって発信していく必要があるのではないでしょうか。

日本家庭科教育学会が中心となって，昨年９月に「生活やものづくりに必要な学びの充実をめざすネットワーク」を設立し，積極的に社会に発信する活動を起こしています。中国地区会も，平成23年度から新たな共同研究「生活実践力を育成する家庭科の授業開発」を開始します。是非，多くの地区会員の皆様方のご賛同とご参加をいただけますよう，心より期待致しております。

第３０回　日本家庭科教育学会中国地区会総会　報告

第30回日本家庭科教育学会中国地区会研究発表並びに総会が、2010年8月21日（土）に岡山大学教育学部で開催された。

総　会　次　第

司会進行　　佐藤　園

1　開会の辞　　佐藤　園
2　会長挨拶　　伊藤　圭子
3　会場校挨拶　　河田　哲典
4　議長選出　　福田　恵子
5　議事
（1）報告事項
①平成21年度庶務報告　　望月てる代
②平成21年度会計報告　　望月てる代
③平成21年度会計監査報告　杉本真由実
（2）協議事項
①平成22年度事業計画（案）　望月てる代
②平成22年度会計予算（案）　望月てる代
③共同研究について　　西　敦子
④その他　　多々納道子
6　次期会場校挨拶　　西　敦子
7　閉会の辞　　佐藤　園

［報告事項］

1．平成21年度　庶務報告

①　地区会現況報告（平成21年7月末日　現在）
鳥取県8名　広島県34名　岡山県22名　島根県23名　山口県12名
計99名　　（平成20年7月末　90名）

②　平成21年度事業報告　（平成21年4月～平成22年3月）
平成21年6月　日本家庭科教育学会中国地区会第29回研究発表会並びに総会案内送付　（広島大学）
平成21年6月　地区役員改選
平成21年8月　役員会開催　（広島大学）
平成21年8月　日本家庭科教育学会中国地区会第29回研究発表会並びに総会（広島大学）
平成22年3月　会報第30号発行

2．平成21年度　会計報告

＊一般会計（自：平成21年4月1日～至：平成22年3月31日）

＜収入の部＞　　（単位　円）

費　目	予算額	決算額	摘　要
前年度繰越金	98,789	98,789	
地区会費	90,000	64,000	1,000×64人分
本部からの交付金	68,300	75,440	
教大協からの補助金	30,000	30,000	
雑収入	10	612	預金利子，報告書売上
合計	287,099	268,841	

＜支出の部＞　　（単位　円）

費　目	予算額	決算額	摘　要
総会費	70,000	70,000	
通信費	15,000	28,890	
事務用品費	10,000	3,712	
会議費	10,000	10,000	
印刷費	12,000	0	会報30号
雑費	2,000	10,000	香典（元地区会長）
特別会計へ繰入	100,000	100,000	
予備費	68,099	0	
合計	287,099	222,602	

＜次年度繰越金＞　　46,239　円

＊特別会計　（自：平成21年4月1日～至：平成22年3月31日）

＜収入の部＞　　（単位：円）

事項	予算額	決算額	備考
前年度繰越金	488,134	488,134	
一般会計から繰入	100,000	100,000	
売上金	5,000	0	
利子	50	0	
計	593,184	588,239	

＜支出の部＞

事項	予算額	決算額	備考
共同研究報告書発送費	240,000	0	
予備費	353,184	0	
計	593,184	0	

＜次年度繰越金＞　　588,239　円

3．平成21年度　会計監査報告

［協議事項］

1．平成22年度事業計画（案）　（自：平成22年4月1日～至：平成23年3月31日）

平成22年6月　共同研究報告書発行
平成22年7月　日本家庭科教育学会中国地区会第30回研究発表会並びに総会案内送付（岡山大学）
平成22年8月　役員会開催（岡山大学）
平成22年8月　日本家庭科教育学会中国地区会第30回研究発表会並びに総会（岡山大学）
平成23年3月　会報第31号発行

2．平成22年度会計　予算（案）

＊一般会計（自：平成22年4月1日～至：平成23年3月31日）

<収入の部>　（単位：円）

費　目	21年度決算額	予算額	摘　要
前年度繰越金	98,789	46,239	
地区会費	64,000	90,000	1,000×90人分
本部からの交付金	75,440	74,600	
教大協からの補助金	30,000	30,000	
雑収入	612	110	預金利子
計	268,841	240,949	

<支出の部>

費　目	21年度決算額	予算額	摘　要
総会費	70,000	70,000	
通信費	28,890	15,000	
事務用品費	3,712	10,000	
会議費	10,000	10,000	
印刷費	0	5,000	会報31号
雑費	10,000	2,000	
共同研究費（特別会計）	100,000	100,000	共同研究費
予備費	0	28,949	
計	222,602	240,949	

＊　特別会計　（自：平成22年4月1日～至：平成23年3月31日）

<収入の部>　（単位：円）

事　項	21年度決算額	予算額	摘　要
前年度繰越金	488,134	588,239	
一般会計から繰入	100,000	100,000	
売上金	0	5,000	報告書売上金
利子	105	50	
計	588,239	693,289	

<支出の部>　（単位：円）

事　項	21年度決算額	予算額	摘　要
報告書出版費（買い上げ）	0	240,240	@2,184×110冊
予備費	0	453,049	
計	0	693,289	

4．共同研究について

5．その他

日本家庭科教育学会

中国地区会

第３０回　研究発表会・総会

研究発表要旨集

日時：平成２２年　８月２１日（土）

場所：岡山大学　教育学部（講義棟１階）

岡山市北区津島中３－１－１

TEL　０８６－２５１－７６７９

日　　程

（１１：３０～１２：５０	役員会）
１２：３０～	受付
１３：００～１３：３０	総会
１３：３０～１４：５０	研究発表
１４：５０～１５：００	休憩
１５：００～１６：００	講演会
１６：００～１６：３０	交流会
１６：３０	閉会

研究発表（１３：３０～１４：５０）

13:30～13:45　１．子どもの発達段階をふまえた効果的な食育のあり方
鳥取大学　○福　田　恵　子

13:45～14:00　２．食育活動における学校給食メニュー作りの参加効果
総社市立総社北小学校　○森　谷　佳菜子
島根大学教育学部　多々納　道　子

14:00～14:15　３．岡山県の大学生における栄養素等摂取量
岡山大学大学院教育学研究科　○河　田　哲　典
美作大学短期大学部　山　田　英　明

14:20～14:35　４．「ふりかえり」にみるロールプレイングを用いた授業が
児童の自尊感情に与える影響
福山市立女子短期大学　○正　保　正　惠
広島大学附属三原小学校　林　原　　槙
広島大学大学院教育学研究科　伊　藤　圭　子

14:35～14:50　５．家族の健康を中軸とした授業ストーリーの提案―中学校における実践―
山口大学附属光中学校　○船　田　敦　子
山口大学教育学部　西　　敦　子

※発表時間　１２分、質疑応答３分（1鈴　１０分、2鈴　１２分、3鈴　１５分）

【発表番号１】

子どもの発達段階をふまえた効果的な食育のあり方

鳥取大学地域学部　福 田 恵 子

Ⅰ．目的

食育基本法の制定以来、栄養教諭による指導体制の整備、教職員等への指導力の向上を意図した資料や学習教材の配布、給食の充実等が政策的に推進されてきた。そして、学校行事、総合的な学習の時間、給食、家庭科の授業等における多様な食に関わる実践事例も紹介されるようになった。そこでは、体験（栽培や調理等）を導入し、地域の諸資源（ひと・もの・環境）を活用したものも多く、食へのさまざまな関心（生産・流通・消費や文化、技術など）が喚起されている。加えて、偏った栄養摂取や生活習慣病の増加を背景として、幼少期からの栄養指導が一層重視されるようになってきており、意識や行動の変容を起こしうる教育が求められている。しかし、これまでの家庭科教育の成果が問われている点、栄養バランスに偏重した指導、子どもの発達段階への理解が不十分な指導事例（児童の栄養指導に食事バランスガイド―サービング数（抽象概念）のカウントで栄養評価を行う―が用いられているケース）等に接し、改めて子どもの発達や欲求をふまえた学習内容や指導方法を検討し直す必要があるように思われた。そこで、本研究では、まず、認知、欲求、仲間関係、セルフケア等に関する発達理論を概観する。次に、児童期から高校生期における食生活の状況とその規定要因を分析する。さらに、主体的・発展的に学びを深めた学習方法を把握することを通して、発達段階に応じた食育のあり方についての提言を行うことを目的とする。

Ⅱ．方法

(1) 調査対象および調査時期：美作大学学生199名。2009年12月実施。

(2) 調査方法：各調査項目ごとに説明を加え、小学校・中学校・高校時の自分の状況を思い起こす方　法で回答を求めた。質問紙はその場で回収した（有効回答数100%）。

(3) 調査内容：児童期（小学校低学年，高学年），青年期前期（中学），青年中期（高校）の各発達段階ごとに、次の項目を調査した。①自らの食生活状況の評価、②食生活への影響要因―家族、友人、好みや欲求、学校での学習、雑誌･TV等の情報、③家庭や学校における食学習の重要性認識、④共食、嗜好、健康や成長、身体美への関心度、⑤意欲的かつ主体的に学びを深めた学習の形態（個別指導、グループ活動、情報収集、関心に基づく課題学習、体験、発表機会）。

Ⅲ．結果と考察

小学校低学年の時期は、家庭の影響が大きいことから、家庭との連携のもと「共食」の楽しさを味わい、自分の「嗜好」といった具体的な事柄と成長を振り返り、これらを結びつけながら、簡単な意思決定を含んだ食習慣の形成が望まれる。高学年になると、食学習の意義も多少認識されるようになることから、「共食」や「嗜好」に関わった内容を大切に展開するなかで、成長や健康を促す実践計画をサポートすることで、自己コントロール感を持たせる学習が望まれる。学習方法については、協同的な体験型の課題学習を導入することで学習意欲が高まると考えられる。

中学生時期は、「共食」や「嗜好」とともに「健康」についての関心も高まり、学習の意義を認識するようになると同時に、健康状態の将来予測をふまえて自己決定ができる段階になる。また、このような形式的操作は食に関わる領域の知識にも影響される。これらをふまえ、調べ学習や体験、協同的な課題学習を通して、自分の食生活を長期的な視点から点検・評価し、改善の方向性を探る学びと自己コントロール感覚がもてる実践が有効であると考えられる。

高校生時期になると、「共食」や「嗜好」といった下位の動機に加えて、「健康」や「美」といった上位の動機も重視されるようになり、多面的に食を見つめることができるようになる。中学期と同様の学習方法が有効であるが、高校期では多様な価値観を認めることができるようになることから、協同的な学びの効果が一層期待できる。また、学習成果を発表する機会を設定することも有効である。

【発表番号２】

食育活動における学校給食メニュー作りの参加効果

総社市立総社北小学校　○森谷佳菜子
島根大学教育学部　多々納道子

Ⅰ　はじめに

食は人間が生きていく上で最も基本的な欲求の一つであり、生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むために重要な生活領域である。したがって、社会の急激な変化に対応して心身ともに健康で人間性豊かな生活を営むために、食に関する学習は生涯学習における現代的課題となる。その基礎段階での食育を担う幼稚園や学校教育の役割は極めて大きい。

島根大学教育学部附属学校園では、学力形成の基盤となる生活面にも目を向け、家庭との連携のもとに給食、弁当、家庭科の学習などを通して食育の推進に取り組んでいる。本報告は、小学校５年生と６年生がさつまいもを使った給食メニュー作りを行うという食育活動の実践を2009年９月~11月にかけて試みたので、その取り組み状況と効果について報告する。

Ⅱ　さつまいも給食の取り組み

学校給食を実施している小学校の食育活動の取り組みの一つとして、島大農場で生産されたさつまいもの提供を受け、地産地消の給食を実現している。加えて、さつまいもの研究・教育に携わっている教員、技術職員や栄養士の協力を得て、さつまいも収穫後の10月～翌年の３月にかけてのさつまいもメニュー時には、さつまいもの種類や特徴、栄養、調理方法や栽培方法、地産地消などについて、学校放送を通して話してもらい、子ども達の理解を深めている。

Ⅲ　さつまいも給食メニューつくりへの参加

さつまいも給食のメニューとしては、さつま汁やふかしいもなどの定番だけでなく、栄養士がさつまいもカレーやシチュー、さつまいもの中華風煮などの新しいメニューを考案して提供することによって、子ども達から好評を得ている。そこで、食育活動の一端として５年生と６年生に給食として可能なものを実際に提供することを条件に、自分が食べたい新しいさつまいもメニューを募集した。これらの取り組みは学級活動に位置づけ、子ども達が自由に取り組み、考案した。

その結果、5、6年生の181人の約1/3にあたる58人から、計25種類のメニューの提供があった。それらの中から、栄養士が子ども達の好みや栄養バランス、給食として調理が可能かどうかなどの基準によって「さつまいものそぼろ煮」を選定し、メニューとして提供した。この「さつまいものそぼろ煮」のメニューの日には、栄養士から取り組みの経過を学校放送によって話してもらった。また、2009年11月の「給食だより」には、考案した３名の紹介やレシピの紹介などを行った。さらに、子ども達が提供したメニューをすべてを「さつまいもBOOK」という冊子にまとめ、附属学校園の子ども達全員に配布し、活用を図った。

Ⅳ　学校給食メニュー作りの参加効果

学校給食メニュー作りの参加効果を明らかにするため、学校給食の目標としている、(1)給食の時間をわくわくしながら待つ、(2)給食の時間が楽しい、(3)給食を美味しく食べる、(4)強制されなくても残さず食べる、(5)農産物の生産方法や食材について理解する、の５つの観点について、アンケート調査によって「さつまいものそぼろ煮」と定番でしかも好評の「さつま汁」と「ふかしいも」のさつまいも給食と比較した。

その結果、(2)、(3)、(4)の項目については、通常のさつまいも給食に比べて高得点であり、自分たちで考えた給食メニューが提供されたことによって、美味しくて、残さず食べ、給食の時間が楽しいと捉えたものが多かったことが明らかになった。給食メニュー作りに参加するという、いわゆる参加型の取り組みの効果と考えられる。

今回の調査結果を踏まえて、食育活動を充実させるため、さらに参加型の食育活動について検討していきたい。

【発表番号３】

岡山県の大学生における栄養素等摂取量

岡山大学大学院教育学研究科　○河田哲典
美作大学短期大学部　山田英明

[目的]　大学生（女性）の栄養素等摂取量の詳細についてはその報告は多い。しかし，大学生（男性）の栄養素等摂取量は国民健康・栄養調査において，この年代（20～29歳）の成績が報告されているにもかかわらず，未だ充分に蓄積されているとはいえない。特に，岡山県の大学生（男性）における栄養素等摂取量，特にビタミン摂取量に関する報告は少ない。そこで，岡山県の大学生の食生活教育の基礎資料を蓄積することを目的として，大学生（男性）の食事からの栄養素等摂取量を調査したところ，ビタミンA，D，B-2，B-6，葉酸，B-12摂取量はいずれも平成18年（2006年）国民健康・栄養調査成績に比べ低値であることが明らかにされ，A，C は野菜，D は魚介類，B-1，B-2 は食品摂取総量がそれぞれ低値であることと関連を有することが示唆された。これらの知見を基に，岡山県の大学生の食生活の構造を明らかにする目的で，栄養素等摂取量，特にビタミン摂取量と欠食及び野菜摂取量の関連を検討した。

[方法] 岡山県保健福祉部健康対策課及び岡山県栄養士会からの受託研究「健康生活応援モデル事業」の一環として，岡山県の大学生314名（男性178名・女性136名）を対象に，2006年12月及び2007年11月の平日１日の欠食の有無等の食事状況，栄養素等摂取量及び食品群別摂取量を調査した。

[結果] 1. ビタミン摂取量と欠食の関連

欠食のある大学生（男性62名・女性17名），欠食のない大学生（男性116名・女性119名）のビタミン摂取量を比較したところ，男性ではA，E，D，ナイアシン，B-6，葉酸，B-12，パントテン酸，C 摂取量は欠食により有意な低下を示すことが認められた。しかし，男性のビタミンK，B-1，B-2 摂取量は欠食との関連が認められなかった。また，欠食により男性の食品摂取総量，米・加工品，小麦・加工品，緑黄色野菜，その他の野菜，魚介類，乳類，油脂類の摂取量は有意な低下を示したが，いも類，豆類，果実類，きのこ類，藻類，肉類，卵類，菓子類，嗜好飲料類の摂取量に及ぼす欠食の影響は見られなかった。さらに，1,000Kcal あたりのビタミン摂取量を比較したところ，男性では全てのビタミンにおいて欠食との関連が認められなかった。

2. ビタミン摂取量と野菜摂取量の関連

健康日本21における野菜摂取量の目標値を基準にして，野菜摂取量350g以上，233g以上350g未満，117g以上233g未満，117g未満の４群に分け，ビタミン摂取量と野菜摂取量の関連を調べた。男性では野菜摂取量が多い群でA，E，K，B-1，B-2，ナイアシン，B-6，葉酸，パントテン酸，C の摂取量は高値を示し，これらのビタミンの摂取量は野菜摂取量と関連を有することが明らかにされた。しかし，D，B-12 摂取量と野菜摂取量の関連は見られなかった。また，エネルギー，たんぱく質，カルシウム，鉄摂取量も野菜摂取量と関連を有するにもかかわらず，脂質エネルギー比率，飽和脂肪酸比率は野菜摂取量との関連は認められなかった。次に，食品群別摂取量と野菜摂取量の関連を検討したところ，野菜摂取量の多い群では食品摂取総量，米・加工品，緑黄色野菜，その他の野菜，きのこ類，卵類，油脂類の摂取量も多く，野菜摂取量との関連が認められた。一方，小麦・加工品，いも類，豆類，果実類，藻類，魚介類，肉類，乳類，菓子類，嗜好飲料類の摂取量は野菜摂取量との関連を示さないことが明らかにされた。さらに，1,000Kcal あたりのビタミン摂取量を比較したところ，男性では野菜摂取量が多い群でA，E，K，B-2，B-6，葉酸，パントテン酸，C の摂取量が高値を示した。

以上の結果から，当然のことながら，欠食はビタミン摂取量を有意に低下させることが明らかにされた。また，ビタミン摂取量と野菜摂取量は関連することが明らかにされ，野菜摂取量は食事のいわゆる「質」を示す指標となり得る可能性が示唆された。

【発表番号4】

「ふりかえり」にみるロールプレイングを用いた授業が児童の自尊感情に与える影響

○福山市立女子短期大学・正保正惠
広島大学附属三原小学校・林原　慎
広島大学大学院教育学研究科・伊藤圭子

【背景】①子ども虐待・DV、育児不安、引きこもりなどわが国における家族をめぐる問題が山積する中、2008年新指導要領に「家庭生活を大切にする心情をはぐくむ」ことが明記された。②教育領域において、1950年代初期から、主として非行を始め攻撃的行動を持つ子どもへのヒューマニスティックアプローチとして「心理教育」が開発され、発展してきた。「心理教育」とは、自己および他者理解の促進と相互信頼の環境づくりという「心理的」な支援と、新しい行動の習得という「教育的」な部分を併せ持つものであり、家庭科における家族生活教育に応用可能と考えられる。③家族生活についての教育(Family Life Education)がアメリカで1980年代から行われており、アジアでも台湾、韓国において法整備とともに定着してきており、正保は2009年第52回日本家庭科教育学会（於札幌）において台湾の家族生活教育で用いられているロールプレイングという方法について発表を行った。④2010年第53回日本家庭科教育学会（於京都）において、「小学校家庭科におけるロールプレイングを用いた授業が児童の自尊感情に与える影響」について発表し、とくに「攻撃的」な児童に対して「ロールプレイング」によるアサーション授業を通した家族生活教育が有効であることを、西らの研究を敷衍しながら実証した。

【目的】我が国の小学校家庭科において、「家庭生活を大切にする心情をはぐくむ」ということを具体的にはアサーティブなコミュニケーションによって自尊感情（家族）を高めるととらえ、どのようなタイプの児童に効果的なのかを研究授業と事前・事後テスト、家庭へのアンケートを実施して実践的に影響を測定した結果を受け、4つのタイプ（アグレッシブ・アサーティブ・ディフェンシブ・その他）に分けて「ふりかえり」シート、保護者アンケートの記述部分に違いがあるか、質的に分析する。

【方法】①家族とのコミュニケーションを改善することをめざすロールプレイングの授業（アサーティブな態度を身につけさせる授業・広島県内M小学校5年生2時間×2回・2クラス）を設計し実施した。なお、授業終了毎に自由記述によって「ふりかえり」シートを書かせた。②事後テスト終了後、保護者へのアンケートを実施し、家庭内における子どものコミュニケーションタイプ等を聞いた。③　「ふりかえり」シート、保護者アンケートの記述部分を、ワードマイナーで分析する。

【結果・考察】先の実証研究における「ロールプレイングの授業は、「アグレッシブ」　($p<.001$) な児童と、「アサーティブ」($p<.01$) な児童に特に効果的であった。家庭で「アグレッシブ」な児童は、授業によって自尊感情（家族）も有意に高くなった ($p<.01$)。」などの結果を受け、(1) 児童による「ふりかえり」シートを、ワードマイナーによるマッピングで分析した結果、「アサーティブ」の周りに、「譲る」「大切」「ポイント（授業内であなたも私もOKになるためのポイントを解説)」「相手」「会話」「もらう」「両方」などのワードが並んだ。相手を大切にし、会話をとおして譲ることで自分も両方がOKになるというプロセスを体得している様子が見えてきた。「アグレッシブ」の周りには、「理由」「言う」「お互い」「納得」「自分」「分かる」などが並び、まずは自分の主張について、理由を言うことで相手に納得してもらうという姿勢があることがわかった。「ディフェンシブ」では、「兄」「ケンカ」「場面」「考える」「意見」などのワードが並び、家庭におけるきょうだいとの葛藤を重ねる中で、「我慢」をすることが最も攻撃をかわす生き方であることを「学習」しているようであった。(2) 保護者アンケートの記述では、多くのワードが中央に集まったが、「アサーティブ」の周りに「風呂掃除」「通販」、「アグレッシブ」の周りに「理解」「姉弟」「部屋」「宿題」「欲しい」、「ディフェンシブ」の周りに「兄弟」「喧嘩」などが並んだ。日頃から家庭での家事の役割分担や共通の話題の有無で、コミュニケーションのタイプが変わる可能性が見えてきた。

【発表番号５】

家族の健康を中軸とした授業ストーリーの提案～中学校における実践

山口大学教育学部　　西　敦子
山口大学教育学部附属光中学校　○船田　敦子

１　研究目的

新学習指導要領によると、家庭分野では、家族と家庭の役割、生活に必要な衣食住についての基礎的な理解と技能を養い、自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視してこれからの生活を展望し、生活をよりよくしようと習得したものを活用して課題を解決するために工夫し、創造する能力と実践的な態度の育成が求められている。

生徒は、一生の間に、いろいろな家族形態を経験する。そのいろいろな家族のシチュエーションにおいて、自己と家族の関係をどうするか、さらに自己・家族・地域社会と環境との関係をどうするか、などの生活問題を解決していかなければならない。

そこで、生活をよりよくするための条件として、「家族が心身ともにより健康的な生活が営めること」ととらえ、３か年（８７時間）を見据えて、家族の健康を中軸とした学習を計画し、実践して、どのような成果があるかを検証し、今後の家庭科教育の在り方について探っていきたい。

２　研究方法

家族の健康を中軸にして、生徒にどのような力をどのように身につけさせていきたいのかストーリーを考える際、限られた授業時間を有効に活用し、学習の円滑化を図るために、学習内容をクロスさせ、流れを工夫した。また、長期休業等を意識して学習計画を考え、実践の場を授業時間のみならず、家庭生活に持ち込むように仕組み、時間を有効に活用して学習を進めた。

さらに、各家庭で実践した「家族のためのより健康的な生活づくり」を発表する場面を設けて授業の中で、全員と共有することによって、いろいろなシチュエーションを擬似的に体験でき、幅広い家族・家庭生活のあり方や関係について考えることができるようにする。これらの学習過程を検討し、実践を通して、生徒の変容から研究の妥当性を検証する。

３　研究結果と考察

３年間を見通して、１年生のはじめの授業で、ガイダンスとして、「健康な生活を支えるもの」についてイメージマップを作成させ、グルーピングして整理させる授業を行った。生徒の大半が、健康を支える鍵は、衣・食・住・環境があり、それが家族と深く関係していることに改めて気付くことができた。その後の学習は、常に、家族の健康を中軸にして学習内容と関連させながら学習を進めることができた。

また、生徒は、学習した時点では、学んだことを家庭生活の中で「いつか」は実現したいと考えることが多い。この気持ちを生かす方法として、「いつか」の場面を家庭学習として設定すれば、学んだことをすぐに実践でき、学習効果も高いことが分かった。つまり、家庭で実践することで、生活に密着した創意・工夫する力を発展させることができ、技能の向上にもつながり、学習の達成感を味わえ、次の学習への意欲向上にもなった。さらに、家庭学習は、教科の特性として必ずそこには家族が存在するため、家族の健康について家族とともに考える機会を多くもて、これからの生活を展望し、生活をよりよくしようと習得したものを活用して課題を解決するために工夫し、創造する能力と実践的な態度の育成を図ることができた。

本研究を通して、生活に密着し、学習と自己・家族・地域社会をつなげるキーワードを学習の中軸として学習を進めることで、学習の目的が明確となり、学習の充実につながることが分かった。今後は、さらなる中軸となるキーワードを探っていきたい。

講演　演題　「民家（伝統的住まい）に学ぶ」

講師　　冨士田　亮子先生

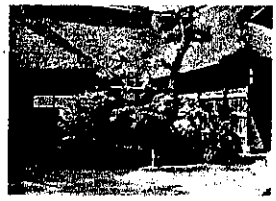
（岡山大学大学院教育学研究科教授）

民家（伝統的住まい）に学ぶ

開催日時：2010年8月21日15：00～16：00
会場：岡山大学教育学部講義棟1階

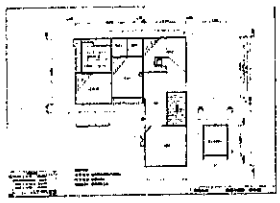
冨士田亮子
（岡山大学大学院教育学研究科）

1．気候適応
＜多雪地域の住まい＞



旧奈良家住宅（両中門造り）

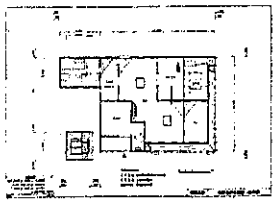
南部の曲家



（参考文献8）

南部の曲家

飛騨白川の民家
（合掌造り）

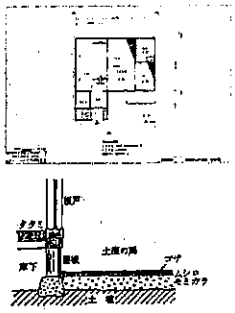


（参考文献8）

白川郷・五箇山の集落

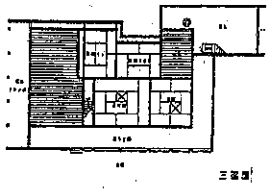
信濃秋山の民家
（土座住まい）

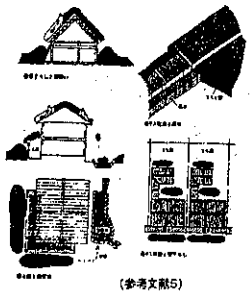
（参考文献8）



（参考文献4）

土縁・雁木・コミセと融雪池

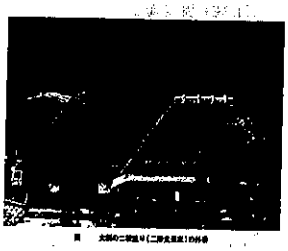


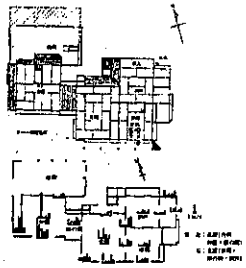


新潟県津川　雁木の町並み

（参考文献5）

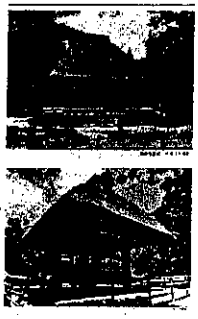
＜高温多湿地域の住まい＞
大隅半島の民家（二棟造り）

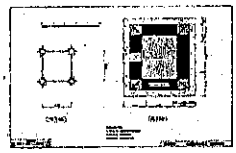




（参考文献4）

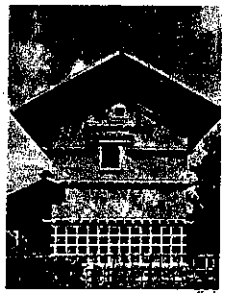
奄美大島の高倉





（参考文献8）

＜多雨地域の住まい＞
水切り壁、尾垂れ



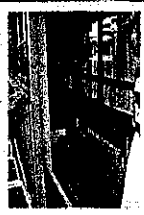
土佐の水切つき土蔵　（参考文献9）

（参考文献8）

大和十津川の民家

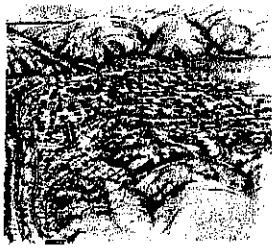
（参考文献5）

＜台風常襲地域の住まい＞
マエダレイタとセキイタ



和歌山県御坊市の民家

＜屋敷林と住まい＞
簸川平野の築地松

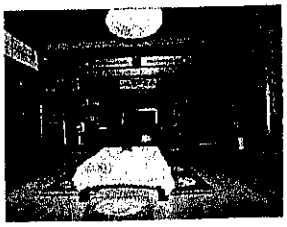


（簸川町田園空間博物館リーフレット）

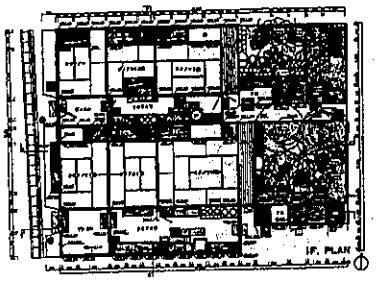
沖縄の民家とフクギ

（参考文献7）

2. 季節適応
町家の夏のしつらえ

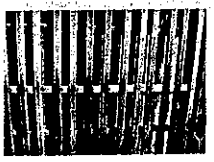


京の町家の平面



（参考文献1）

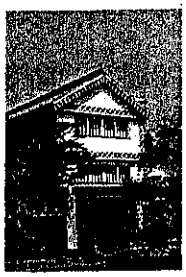
3. 住み手の住まいへの
日常的なかかわり



磨きこまれた格子や板戸

4. 町家と町並み
美濃の卯建のある町並み

倉敷の町家・町並み



吹屋の町並み

参考文献

1）島村昇・鈴鹿幸雄他『京の町家』鹿島出版会(1971)
2）小林昌人『民俗民芸双書　民家と風土』岩崎美術社(1985)
3）三浦豊彦他編『住みよい住宅熱環境』労働科学研究所出版部(1986)
4）花岡利昌『伝統民家の生態学』海青社(1991)
5）木造建築研究ファーラム編『図説木造建築事典[基礎編]』学芸出版社（1995)
6）木造建築研究ファーラム編『図説木造建築事典[実例編]』学芸出版社(1995)
7）伊礼智『オキナワの家』ｲﾝﾃﾞｯｸｽ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽﾞ(2004)
8）日本民家集落博物館『民家の案内』（財）大阪府文化財センター民家集落博物館(2006)
9）『民家の博物館　四国村』(財）四国民家博物館

＊研究室だより＊

鳥取短期大学　杉本真由実

鳥取短期大学幼児教育保育学科は一学年の学生定員が120名、専攻科定員20名、教員14名の学科です。主に保育士資格、幼稚園教諭二種免許状の両資格取得を目指した学生が入学し、そして多くの学生が実際に資格を活かした進路へ進みます。

短大生活２年間のうち、保育士資格に関わる実習が合計６週間、幼稚園教諭に関わる実習が合計４週間あります。私は学科の助手として、主にこの実習の実務を担当しており、実習先である保育所、施設、幼稚園とのやり取りはもちろんのこと、個別の学生指導も行っています。学生指導の内容は、実習先への提出書類やお礼状および日誌の書き方、指導案の内容、実習準備について、挨拶の仕方など多岐に渡りますが、対応をしていて思うことは、基本的なことが身についていない学生が多いということです。ドアのノックをしない、挨拶が出来ない、朝起きる事が出来ず遅刻してしまう、偏食、身だしなみ、マナー･･･挙げればいくつでも出てきそうです。

特に私が驚いたのは、「お茶の入れ方を知らない」、「雑巾(布巾)が絞れない」の２点でした。以前、研究室に数名の学生が来室した際、ある学生にはテーブル拭きを、ある学生には人数分のお茶を急須で入れるように頼んだところ、布巾を固く絞っていないため拭いたテーブルが濡れている、お茶っ葉の分量が分からず、また、急須に入るお湯の量が予測できず、とても濃いお茶を入れてしまう、という状況になりました。また、お茶も回し入れるのではなく、湯呑一つ一つに入れていました。

以上の２点については、大学の授業で教える場はありません。学生たちが入学前までの学びや普段の生活から身につけていくもので、私はそれが当たり前に身についているものだと思っていました。しかし、その「当たり前」を知らない学生もいるのです。知らない学生にどう教えるか、その機会をどう設けるか、ずっと考えていますがなかなか良い案は浮かびません。

私は学生と関わる中で、自分の価値観を学生に押し付けないように、しかし、自分の持っている感覚は大切にするように心がけています。気になったこと、気づいたことはその都度学生に伝え、直した方が良い点やこうしたらもっと良くなるというところをアドバイスするようにしています。それがいつか、彼らが保育者となった時に活かされることを願い、日々奮闘中です。

さて、本学科では「特別研究」という科目を設置しています。これは２年次に開講される通年科目で、必修科目ではありませんが大半の学生が履修しています。各自が興味のある分野や得意な分野、或いは苦手な分野を選択し、各分野を専門としている教員の元で研究を行い、２年間の学びの集大成としてまとめます。そして、口頭発表や実践発表、展示発表など各研究内容に適した形式で発表しますが、どの研究室も研究内容を文章化し、抄録として残しています。口頭発表と実践発表は大学からほど近くにあるホールを貸し切って発表会を行いますが、毎年、発表会に傾ける学生の情熱に圧倒されます。以下、今年度の研究テーマを紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・「育児雑誌・情報を読む」
・「高齢者と園児の世代間交流～実態と効果～」
・「うたのおにいさんおねえさん～魅力ある保育者の表現とは～」
・幼児体育「投げて・ついて・伸ばして・回す～用具の魅力に迫る～」
・人形劇「あやかしの森」
・オペレッタ「アラジン」

〈学校現場から〉

小学校低学年からの家庭科授業実践

岡山県吉備中央町立大和小学校　信清　亜希子

1．はじめに

私は、大学・大学院で家庭科教育を専攻し、子どもたちにとって家庭科が、とても大切な教科であることを学びました。しかし、小学校では、5・6年生しか家庭科を学びません。「なぜ、5・6年生にしか家庭科が存在しないのか？」それは、私にとって大きな疑問でした。今年度、1年生の担任となり、児童と接する中で、「家庭科を1年生から学ぶことができれば、もっと家庭科で獲得すべき力を身に付けることができるのではないか。」と考えるようになりました。そこで、2学期に、生活科で栽培したさつまいもを使ってスイートポテトを作る際に、家庭科の学習内容を取り入れ、授業を行いました。詳細については、家庭科教育学会において研究発表を行う予定です。

2．授業実践

まず、スイートポテトを作る前に、「なぜ、調理をするのか？」について考えました。児童は、1年生なりの言葉で、「そのままでは食べられないさつまいもを、食べられるようにするために調理する。」ということを説明することができました。さらに、調理方法や調理に使う道具についても学習しました。児童は、家庭でのお手伝いの経験を思い出し、「切るときには包丁を使うよ。」など、どんどん手を挙げて発表していきました。

そして、いよいよ調理です。スイートポテトを作るために必要な調理方法は、「洗う」「ふかす」「皮をむく」「切る」「つぶす」「味をつける」「まぜる」「形を整える」「ケースに入れる」「焼く」です。このうち、授業時間や児童の実態から、「ふかす」「切る」については、教師が行うことにしました。

最初に、土がついたままのさつまいもを、水できれいに洗います。次に、教師がふかして切ったさつまいもの皮を手でむきます。児童は、加熱することで「皮がやわらかくなった。」「手でむくことができる。」と驚いていました。次に、皮をむいたさつまいもをボウルに入れ、めん棒でつぶします。ボウルが動かないように、友達と協力し、力を入れてつぶしていきました。そこへ、砂糖・牛乳・卵・バターを入れて味をつけ、さらにまぜ合わせます。児童は、他の材料が加わることで、さつまいもの様子が変化したことに気づき、「やわらかくなった。」「しっかりまぜないといけない。」などのつぶやきが聞かれました。次に、形を整えてアルミカップに入れます。児童が作りやすいように、お団子状に丸めてケースに入れることにしました。児童は「楽しい！」と言いながら、粘土を丸めるように、上手に形を整えることができました。最後に、アルミカップをオーブンの天板に乗せて焼きます。焼き上がりを待っている間に、使った道具や机の上を片づけました。スイートポテトが焼き上がると、全員で試食しました。とてもおいしいスイートポテトが完成し、「自分達で作ると最高！」と、みんな大喜びでした。

3．おわりに

調理の後、「家で作りたい！」という声が多く聞かれたので、レシピを学級通信に掲載しました。保護者から、連絡帳に「冬休みに一緒に作りたいと思います。楽しみです。」などの返事をもらい、実際に家庭で作った児童も数名いました。

以上のように、1年生の児童は、調理に対する興味・関心が非常に強く、今回は行わなかった調理方法「切る」についても全員が「やりたい！」と答えました。そこで、3学期に「切る」「(自分で）焼く」などの調理方法を取り入れた実習を行いたいと考えています。

共同研究の募集！！

来年度より、新しいテーマで共同研究をスタートしたいと考えております。新しいテーマは、「生活実践力を育成する家庭科の授業開発」です。生活実践力は、生活の主体者が、現実の生活で出会う課題について、生活の文脈に沿って解釈し、思考・判断・意思決定して実行する、問題解決の力と捉えられます。学校で学んだことを家庭や地域社会において生かし主体的に活用する力、と言い換えてもよいでしょう。こうした生活実践力の育成は、家庭科創設以来一貫して目指してきたものです。平成23年度より順次完全実施される新学習指導要領の基本理念に掲げた「生きる力」は、家庭科教育が目指す生活実践力そのものであり、変化の激しいこれからの社会を担う子どもたちにとって、家庭科の授業で育んだ力が子どもたちの未来を創る活力に直結すると、意を強くしております。

そこで、既にそれぞれの学校現場で行われている家庭科の取り組みや、新しい理論を提示した試験的な家庭科実践などを中国地区会として報告書にまとめ、全国の先生方にも実践していただけるように発信していきたいと思います。新学習指導要領を踏まえながら、現在の子どもを取り巻く問題状況に対応し、生活実践力を育成するために、家庭科がもっている優れた教育素材を、様々な視点から捉え直して、その計画と授業の一部を研究的に実践して、報告いただければと思います。個人やグループで、多数の会員の参加をお願いいたします。

なお、今回は従来の「研究」部門に加え、小・中・高等学校等の先生が開発された教材等を紹介する「教材紹介」部門を新設して研究の募集をしたいと思います。

共同研究は、下記のような要領で実施します。参加希望者は、６に示す必要事項を、メールかＦＡＸ、又は同封の「共同研究申し込み用紙」を後いて郵送で申し込んでください。

記

１．共同研究テーマ：生活実践力を育成する家庭科の授業開発
２．研究期間：平成23年度～平成25年度
３．報告書の原稿締切：平成25年2月末日（予定）
４．参加資格：日本家庭科教育学会中国地区会会員
５．参加申し込み期限：平成23年6月30日
６．参加申し込みに必要な事項：
　①「研究」部門・「教材紹介」部門別　②代表者名・所属、③グループメンバー名・所属　④題目（仮題目で結構です）、⑤対象学校段階（小・中・高・大・その他（具体的に））、⑥代表者連絡先（〒・住所、電話、FAX、E-メールアドレス）
７．参加申込先：事務局　西　敦子

(問い合わせ先)　〒753-8513　山口市吉田1677-1　山口大学教育学部　家政教育選修
TEL&FAX 083 - 933 – 5413　E-mail：nishi@yamaguchi-u.ac.jp

2010年度　日本家庭科教育学会本部だより

1．2010年度の役員および地区会代表者

本部役員は以下の通りである。

会長：鶴田敦子，副会長：多々納道子，流田直，鈴木敏子

中国地区会代表者：伊藤圭子，西敦子

2．行事報告および予定

・日本家庭科教育学会第53回大会　　2010年7月3日（土）～4日（日）（於：京都テルサ）

・日本家庭科教育学会例会　　2010年11月27日（土）（於：聖心女子大学）

・日本家庭科教育学会セミナー　2011年　3月27日（日）（於：聖心女子大学）

・日本家庭科教育学会第54回大会（予定）2011年月6月25日（土）～26日（日）（於：長崎大学）

3．活動報告

第1回　地区代表者会議（平成22年7月2日、京都テルサにて）

・各地区における研究、特に小・中・高等学校の現場の先生方との関わり方についての意見交流。

・地区代表者会議の今後の司会を持ち回りで実施することが会長より提案された。司会担当地区の順序、議題提案の方法等について、次回までに原案作成（鈴木副会長）。

・「生活やものづくりに必要な学びの充実をめざすネットワーク」の取り組みについて、説明および提案。

組織された経緯、学会とネットワークとの組織的関係について説明。

日本家庭科教育学会が呼びかけ人として入り、ネットワークの核になる。

総会で承認された後、会費徴収の呼びかけを行う。

・来年度大会の案内。

平成23年6月25日（土）・26日（日）長崎大学キャンパス

第2回　地区代表者会議（平成22年11月27日、聖心女子大学にて）

・地区代表者会議の議長持ち回りについて審議し、以下のことが決定した。

担当地区の順番は大会開催順とする

例会と大会の2回分を担当地区が開催する（1年間担当）

実施は2011年度の例会からとする（2011年度例会・2012年度大会）

2011年度例会から開始し、東海地区が受け持つ

開催年	担当地区	回
2008	東海地区	51
2009	北海道地区	52
2010	近畿地区	53
2011	九州地区	54
2012	理事会	55
2013	東北地区	56
2014	中国地区	57

・2011年度大会案についてプログラム案が示された。

・財務より、大会開催地区への補助金を減額する件、地区交付金を減額する件が提案され、承認された。事務所移転費用のため。

・仮称『家庭科教育Q＆A』の項目案について、Q＆A項目数は25項目程度とする。内容は検討。1項目について見開き2頁とし、その半分は図、表、写真などを挿入、執筆内容はがっちりしたもの。執筆者は家庭科関係者がよいのではという案がある。出版社未定。出版時期を予定より早めてはという意見があり、検討中。（予定ではH22：家庭科教育学会からの時間増取り組みに関するパンフレット　H23：課題研究のまとめの出版物　H24：家庭科資料Q＆A）

・略称「生活の学びネットワーク」に関して、11月現在の会員460名。発起人の一人に鶴田敦子会長。

・その他

選挙規約について意見交換。2011年6月理事・会長選挙。1月発行の学会誌に有権者名簿を同封する。

（西敦子）

【 第３１回　研究発表会ならびに総会のご案内 】

日　時：平成２３年８月２０日（土）

場　所：山口大学　教育学部Ｂ棟２階

※　研究発表申し込みは、同封の申し込み用紙にてお願い致します。
※　なお，研究発表プログラムや講演内容の詳細については，研究発表の申し込み締め切り(６月１日)後に発送いたします。

事務局だより

１．会員移動（2010. 3. 18～2011. 3. 17）

＜新入会員＞（敬称略）

（岡山県）森谷佳菜子
（広島県）小倉亜砂、河田百合子、高畑律子、斉藤紀子、佐藤敦子、重光良美
正保正恵、鳥井葉子、平井美幸、森下友紀
（山口県）宇都宮通子、船田敦子

＜退会会員＞（敬称略）

（鳥取県）藤原由美子
（山口県）井上佳織理、岳田衣実

２．地区会費の納入のお願い

地区会費の納入状況についてのお知らせを同封しています。2011年度の地区会費とともに未納分の地区会費を下記の口座に納入して下さいますよう、お願いいたします。
お知らせの入っていない方は、2011年度まで地区会費が納入済です。

銀行口座	広島銀行　西条南支店　普通
振替口座番号	３１５０２２０
加入者名	日本家庭科教育学会　中国地区会

３．事務局連絡先

住所・勤務先の変更などがございましたら、事務局までお知らせ下さい。

〒739－8524　東広島市鏡山１－１－１
広島大学教育学部　望月　てる代
ＴＥＬ　（０８２）４２４－７１７０
Ｅメール：tmochiz@hiroshima-u.ac.jp

編集後記

会報第３１号をお届けいたします。第３１号会報発行に当たりまして、年度末のお忙しい中、ご執筆くださいました先生方に感謝申し上げます。
８月の山口大学での第３１回大会では、多くの会員の皆様にお目にかかれますことを楽しみにしております。

共同研究申し込み用紙

会報に記しておりますように、平成23年度から平成25年度にかけまして、中国地区会共同研究として、「生活実践力を育成する家庭科の授業開発」に取り組みたいと思います。

個人やグループで、多くの会員の皆様に参加していただければと思います。

参加を希望される方は、下記に必要事項を記入し、ＦＡＸか郵送でお申し込みくださるか、下記の必要事項をメールに記載してお送りください。

なお、参加資格は、「日本家庭科教育学会中国地区会会員」となっておりますが、共同研究の申し込みと同時に会員になっていただいてもかまいません。入会希望の方がおられましたら、下記までご連絡をいただければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

送付・連絡先
〒７５３－８５１３　山口市吉田１６７７－１
山口大学教育学部　家政教育選修　西　敦　子
TEL&FAX　０９８３－９３３－５４１３
E－mail　nishi@yamaguchi-u.ac.jp

参加申し込みに必要な事項

①部門（該当する方に○をつけてください）	「研究」部門　　「教材紹介」部門
②研究代表者氏名（所属）	
③研究グループメンバー（所属）	
④研究題目	
⑤研究対象学校段階（小・中・高・大・その他（具体的に））	
⑥研究代表者連絡先（〒・住所・電話・FAX・Eメールアドレス）	

2011年3月10日

日本家庭科教育学会中国地区会会員　各位

学会事務局

第３１回研究発表会ならびに総会のご案内

会報でもご案内しましたように、平成２３年８月２０日（土）山口大学におきまして標記の会を開催いたします。

つきましては、研究発表を希望される方は、研究発表申込書（切り取り線以下）に必要事項をご記入の上、６月１日（水）までに下記宛ご送付下さい。

送付先

〒753－8513　山口市吉田 1677－1
山口大学教育学部
家政教育選修　西　敦子
TEL：083-933-5413
FAX：083-933-5413
e-mail：nishi@yamaguchi-u.ac.jp

――――――――――――――――切　り　取　り　線――――――――――――――――

発表者・所属 （演者は○印）	
発表題目	
パワーポイント使用の有無	使用する　　使用しない （バージョン　　）
発表代表者連絡先	e-mail： tel：